当日配付・投影資料

趣旨説明

西 芳実　立教大学

東南アジア学会第79全国研究大会（2010年6月6日、愛知大学）
パネル「学術研究と人道支援—2009年西スマトラ地震で壊れたもの・つくられるもの」

第一部　被災と復興支援

趣旨説明

西芳実
（立教大学・AIIC）

4. パネルの構成

事例と構成・論点
＊山岳地域（パダンパリアマン県）の被災　＊緊急・復興支援
＊現地活動団体＋事業本部　＊西スマトラ研究＋紛争・開発・援助研究

第一部　被災と復興支援
「流動性の高い社会における被災と復興」（西芳実）
「SNS国際防災支援センターによる被災と復興」（今井弘）
「アジア協会アジア友の会（JAFS）による「安全な水の確保」事業」（藤原建男）
「日本の教育復興支援事業をどう評価するか」（早川香織）
コメント1　山本直彦、コメント2　手計太一

第二部　流動性の高い社会における知の伝達と変容
パネル　報告要旨、山田信子、青山和佳、石井正子、福武慎太郎
総合討論

1. 問題の所在

- 災害・・・社会の潜在的な課題に取り組む契機
  ×「被災前の状態に戻す」○「被災を契機によりよい状態にする」
  被災前の状況を含めた社会全体についての理解が不可欠
- 研究者は人道支援にどのように関わるのか
  「募金から情報提供へ」…どのような情報か？
  研究の情報はそのままでは実用に適さない？
  実践との関わりは学術研究にとって意義？
- 本パネルのアプローチ
  社会についての理解・研究 ⇄ 災害時の社会・対応
  災害時の社会を見ることを通じた学術研究の発展

図　地震の揺れの大きさと広がり

●発生日時
・・・2009年9月30日17時16分
（インドネシア西部時間）
●震源地
・・・スマトラ島中部沖
（パダン市の西北西約45km）
●震源の深さ
・・・81km
●地震の規模（マグニチュード）
・・・7.6

2009年西スマトラ地震の揺れの大きさ（メルカリ震度階級）

2. 災害時の社会

- 社会が潜在的に抱える課題が目の前に明らかな形で現れる場　・・・平時の社会と裏表の関係にある場
  社会を全体的にどのように復旧するか
- 外来の思想・技術・制度・文物と在地の秩序・論理との相互作用の場
  ・・・イスラム教、植民地統治、国民国家体制etc.
  自律的な東南アジア史像をどう描くか

⇒東南アジア（史）研究の課題に即して
社会についての理解を深めうる場

表　被害状況（西スマトラ州）

県・市	死者数（人）	被災家屋数（棟）	総家屋数（棟）	家屋被災率（%）
パダンパリアマン県	666	83,463	86,690	96
パダン市	383	76,045	178,970	42
アガム県	81	16,287	112,029	15
パリアマン市	48	10,252	17,124	60
南プシシル県	9	7,583	112,387	7
西パサマン県	5	6,286	78,236	8
ソロック市	3	n.a.	n.a.	n.a.
合計	1195	199,916	585,436	

3. 東南アジア学会の取り組み

- 2009年西スマトラ地震（2009年9月30日）
  死者1195人（西スマトラ州）
  うちパダン市（383人）、パダンパリアマン県（666人）。
- 東南アジア学会緊急研究集会（2009年11月25日）
  「支援の現場と研究をつなぐ—2009年西スマトラ地震におけるジェンダー、コミュニティ、情報」
  ＊都市部（パダン市）の被災
  ＊緊急支援
  ＊現場入りした支援団体
  ＊西スマトラを研究対象としてきた研究者

当日配付・投影資料

第一部　被災と復興支援　趣旨説明

西 芳実　立教大学

東南アジア学会春期例会東北大会（2011年6月6日、金沢大学）
パネル「学術研究と人道支援―2009年西スマトラ地震で被災した人々に届けるもの」

流動性の高い社会における被災と復興
—2009年西スマトラ地震被災地の事例から—

西芳実
（立教大学・AIIC・助教）
nishi@rikkyo.ac.jp

1. はじめに

- 災害・・・社会の潜在的な課題に取り組む契機
  - 「被災前の状態に戻す」○「被災を契機によりよい状態にする」
  - 被災前の状況を含めた社会全体についての理解が不可欠
- 社会全体の理解（≠災害を見る・災害に対応する）
  - インドネシアの特徴・・・流動性の高い社会
    - ボランティア社会の顕在化
  - 西スマトラにおける被災前の課題
    - ①衛生的な水の確保の困難
    - ②建築に関する専門性の限界、生計と住居の不安定
    - cf.個別社会の理解度の違い

2. 災害対応におけるインドネシア社会の特徴

- 流動性の高い社会
  - 住居・生業の移動・変更
  - コミュニティの成員は流動的、多様な社会的文化的背景
  - →緊急段階と復興段階が同時期に開始
  - →固定的・自立的なコミュニティ像にもとづく働きかけとのズレ
- ボランティア社会の顕在化
  - 支援事業の専門性と土地勘をもつ国内ボランティア
  - 支援者の論理を踏まえて対応する現地社会
  - →域外のアクターを前提にした復興過程
- 西スマトラではどうだったか？

3. 被災前の社会の課題①

- バダンパリアマン県
  - 内陸部山地～沿岸部　複数の川と川に挟まれた尾根
  - 雨季（9-12月ごろ）。水が特定の地域・時期に集中
- 衛生的な水の確保
  - 水難・地崩れを避けて尾根に居住。
  - 各戸の貯水槽＋川への水汲み。

①貯水槽からの飲水で炊ぎする婦人　②降水による土砂崩れで被害が明らかな道路　③建物を使って明らかな集中豪雨

3. 被災前の社会の課題②

- ミナンカバウ社会
  - 母系制。女が土地・家屋を所有・相続。
  - 男は外の世界に出稼ぎ。

- 生業と住居
  - 核家族化と独立家屋への居住
  - 地域に主たる産業がない
    - （例）農業・漁業労働、建築作業請負、小売業etc.
  - 地元の成年男子・・・出稼ぎに行けなかった／出て戻った
    - （例）建築に関する専門性の限界、生計と住居の不安定

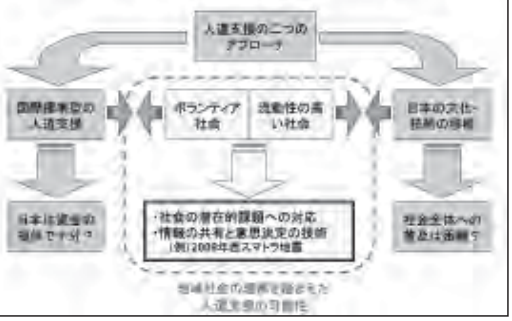
4. 被災と復興の様相

- 西スマトラ地震で被災前の課題が顕在化
  - 住宅の倒壊、貯水槽の損壊
  - 大規模な地崩れ、道路の崩落
- 復興過程における域外からの関与・働きかけ
  - 域外居住のミナンカバウ人を通した募金と支援活動
  - インドネシア各地からの「ボランティア」
  - 国際的な救援復興活動
- 被災前の課題に対応した支援事業
  - 「安全な水の確保」事業（課題①）　創発技術講習会（課題②）
  - ——技術・知識・思想を伝達・普及する試み

おわりに

- 西スマトラ地震の被災と復興
  - 被災前の課題の顕在化（水、生業と住居）
  - 被災を契機にした域外からのさまざまな関与・働きかけ
  - 外来の技術・知識・思想の伝達・変容・定着の場
- 流動性の高い社会における被災と復興
  - 現場で・・・情報共有や意思決定をどう行なうか
  - 知の伝達・・・「うまくいかない」ことにどう対応するか
  - 事業として・・・社会の形が動き続けるなかでどう評価するか
    - cf.個別社会の理解度の違い
  - 時間と空間の広がりの中で・・・被災と復興をどう位置づけるか

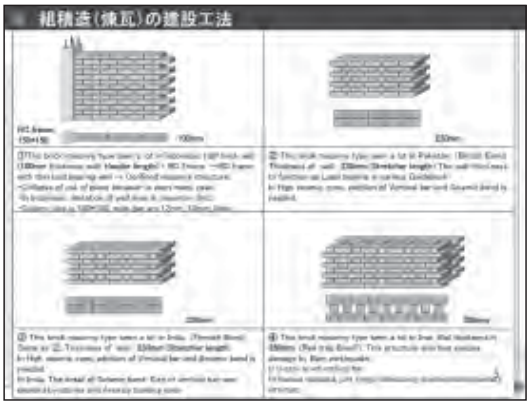
参考：日本の人道支援—インドネシアの事例から

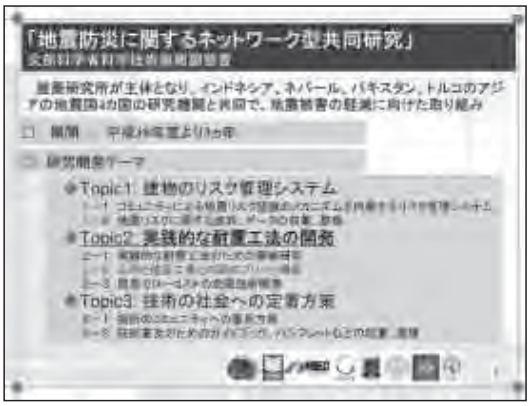


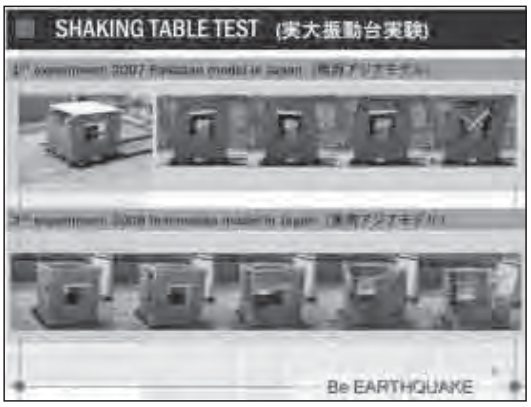
当日配付・投影資料

SNS国際防災支援センターによる耐震技術普及事業

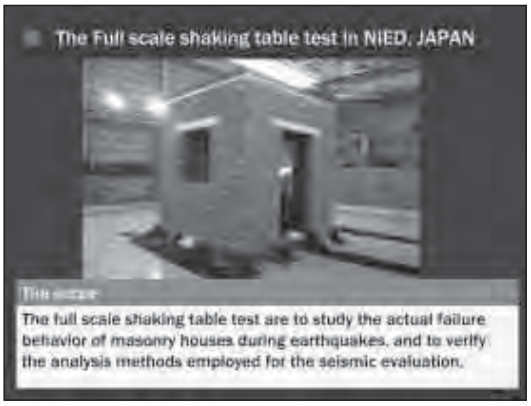
今井 弘　SNS国際防災支援センター






SHAKING TABLE TEST (実大振動台実験)
Be EARTHQUAKE

Be EARTHQUAKE


The Full scale shaking table test in NIED, JAPAN
The full scale shaking table test are to study the actual failure behavior of masonry houses during earthquakes, and to verify the analysis methods employed for the seismic evaluation.

パダン・パリアマン地区の被災状況

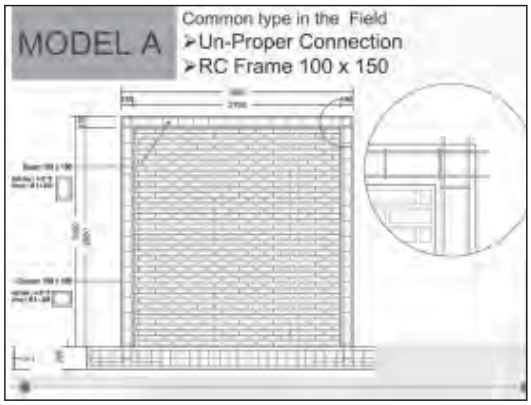
Be EARTHQUAKE

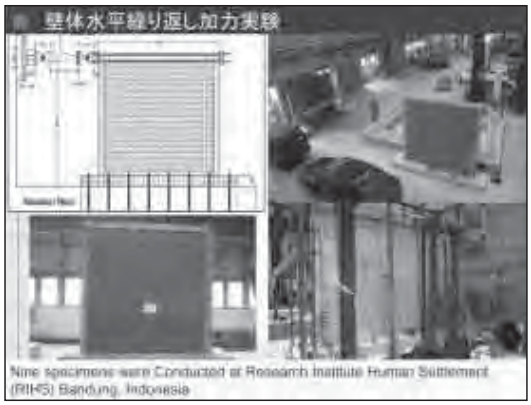
パダン・パリアマン地区の被災状況

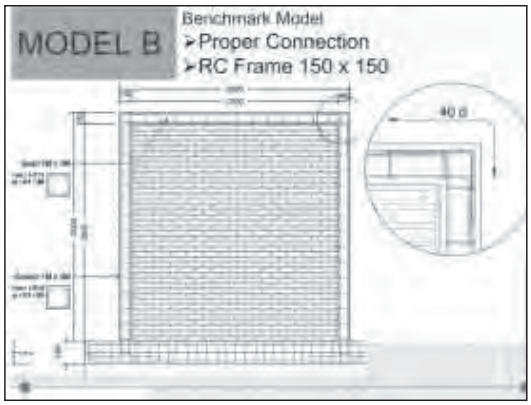
Be EARTHQUAKE

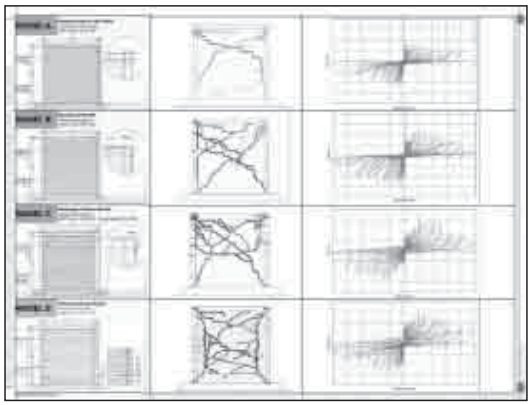
パダン・パリアマン地区の被災状況

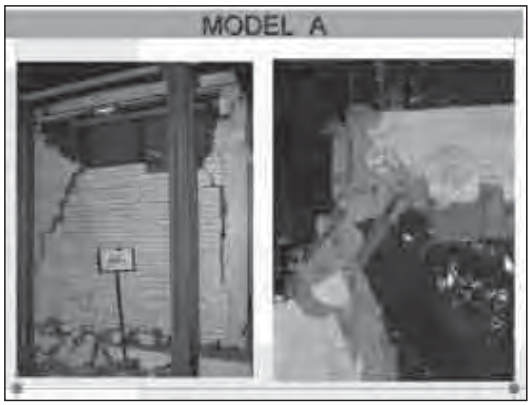
Component 2-2 :
Bridge between Engineering and Construction Works

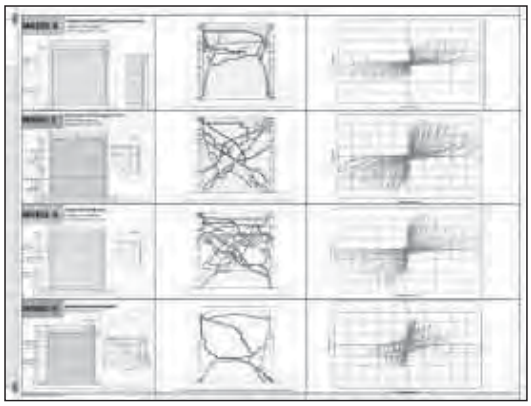

MODEL A
Common type in the Field
➢Un-Proper Connection
➢RC Frame 100 x 150

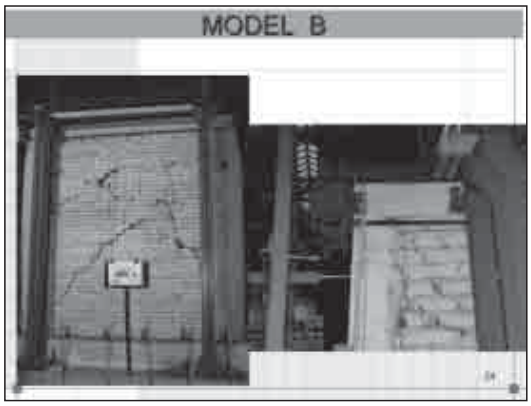

壁体水平繰り返し加力実験
Nine specimens were Conducted at Research Institute Human Settlement (RIHS) Bandung, Indonesia

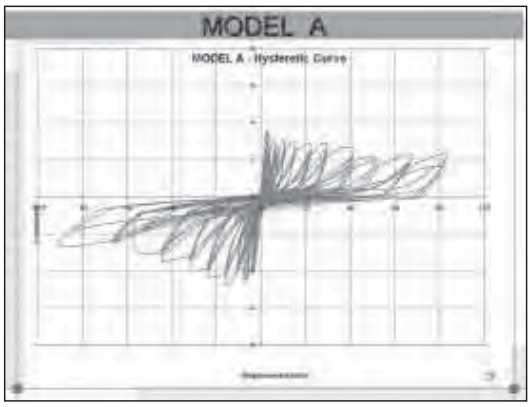

MODEL B
Benchmark Model
➢Proper Connection
➢RC Frame 150 x 150
40 0

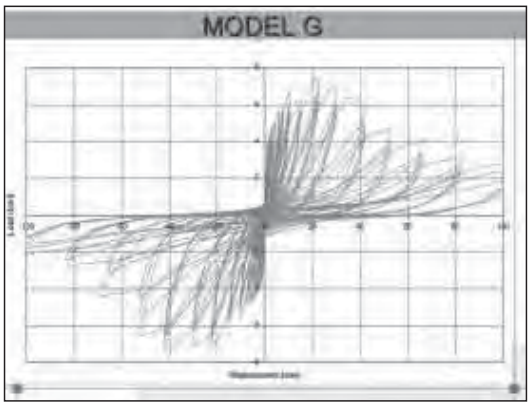


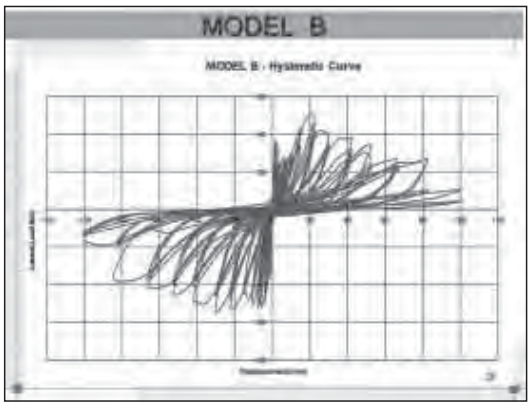

MODEL A

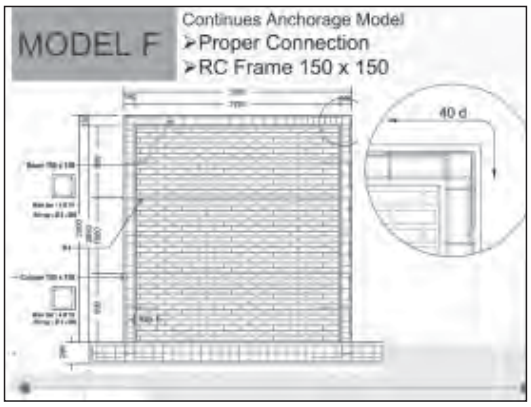


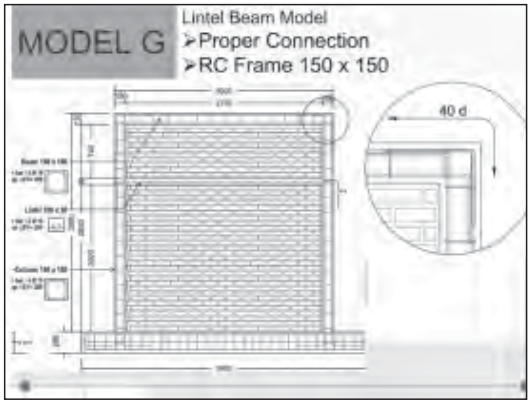

MODEL B

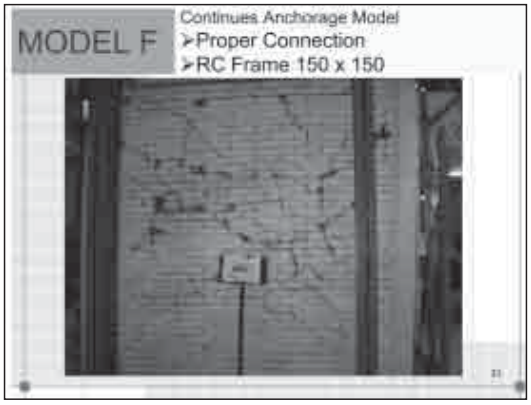

MODEL A
MODEL A - Hysteretic Curve

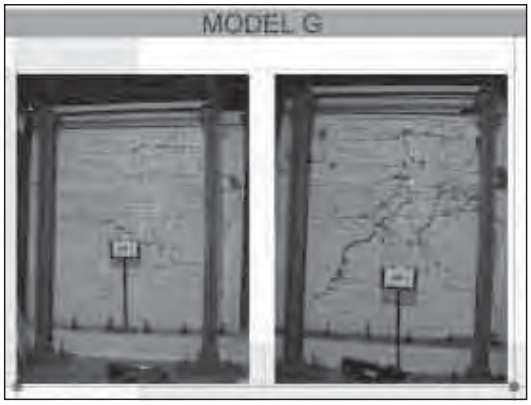

MODEL G

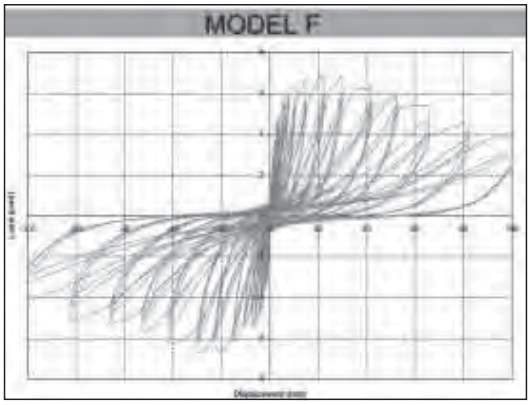

MODEL B
MODEL B - Hysteretic Curve


MODEL F
Continues Anchorage Model
➢Proper Connection
➢RC Frame 150 x 150
40 d


MODEL G
Lintel Beam Model
➢Proper Connection
➢RC Frame 150 x 150
40 d


MODEL F
Continues Anchorage Model
➢Proper Connection
➢RC Frame 150 x 150


MODEL G


MODEL F

西スマトラ州パダン・パリアマン地区における巡回建築指導事業（第1期）
◇1：巡回建築指導（Architectural Mobile Clinic）
建築職人（約100人）にインタビューをし、行政の建設基準であるKey Requirementの理解度を測るとともに、技術的な傾向性や弱点などを調査し、建設現場では建物の安全性を高める方法をその場で指導を行った。

◇2：建築職人トレーニング
鉄筋組み
Sample model by Budi Chanda

西スマトラ州パダン・パリアマン地区における巡回建築指導事業（第1期）
◇2：建築職人トレーニング
巡回建設指導でのインタビューを基に、現地での施工状況を把握した上で、現場に適した建設工法の施工方法のトレーニングを実施した。

◇2：建築職人トレーニング
鉄筋組み

◇2：建築職人トレーニング
Field TEST 材料簡易テスト

◇2：建築職人トレーニング
職人間の意見交換

◇2：建築職人トレーニング
コンクリート練り

◇3：住民向け防災セミナー
職人からの発表
トレーニングに参加した職人から住民に向けて、住宅の安全性を高める方法、工夫を発表してもらう。

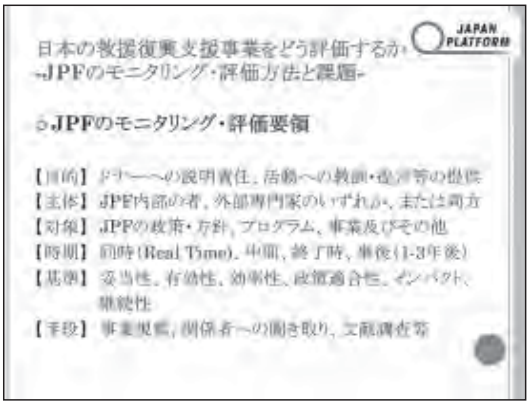
◇Key Requirementの施工方法のマニュアル作成
PANDUAN PELAKSANAAN

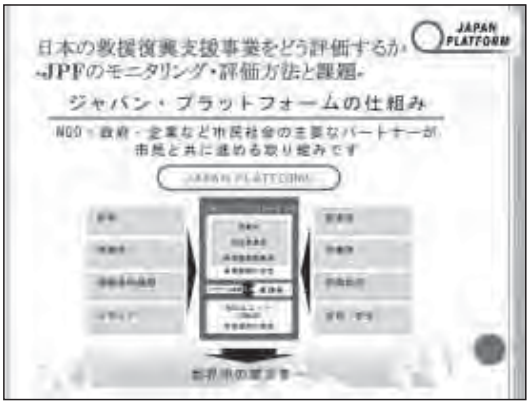
まとめ

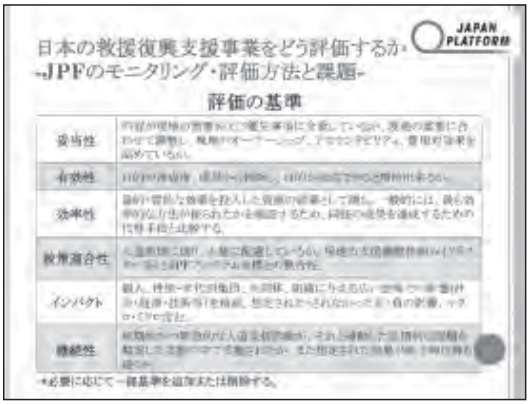
当日配付・投影資料

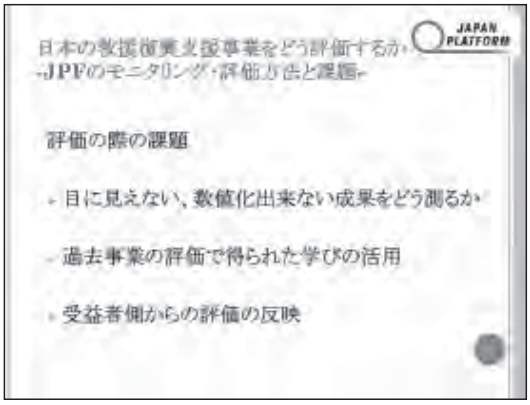
日本の救援復興支援事業をどう評価するか

早川香苗　特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム









当日配付・投影資料

コメント　耐震補強の次に何を考えるか

山本直彦　奈良女子大学生活環境学部住環境学科

東南アジア学会2010年度春季大会
震災と復興支援：2009年西スマトラ地震で
壊れたもの・つくられるもの

「耐震補強の次に何を考えるか」

コメント1　山本直彦
（奈良女子大学生活環境学部住環境学科・准教授）

タイ（トゥンソンホン地区）

バンコクの中心から北へ17km、1980's中頃完成

撮影：田中麻里氏（群馬大学）

6m×6mの広さの恒久住宅は今後どうなってゆくのか？

■増築されていく住まい
・住まいは自ら手を入れるもの
・ハウジングはプロセスである

■町並みはどうなっていくのか？

結局どう増築されたか（タイ）？

撮影＋出典：田中麻里『タイの住まい』鹿島出版会 2006

パンダアチェの現場で

鉄筋コンクリート柱梁構造の桁梁（けたばり）

12年後の町並みはどうなったか（タイ）？

・1984→1996　皆同じような部屋の配列に

アチェ（スマトラ？インドネシア？）では、
都市型の住まいのイメージが
無意識に
共有されているか？

ルアン・タム（居間）
カマル・ティドゥール（寝室）
ダプール（台所）

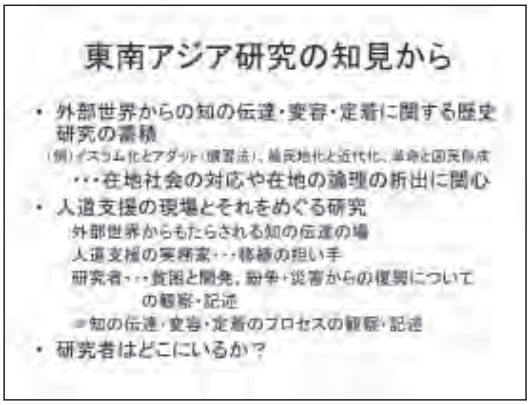
サイツ・アンド・サービス事業

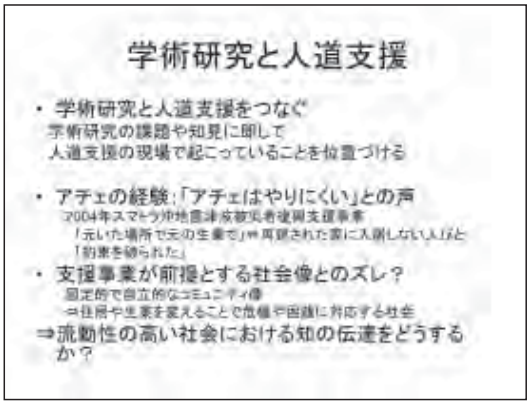
・1970's初頭　東南アジア各国で住宅公団
・1970's後半　スラムクリアランスの失敗
　　コアハウジングの開始
・世界銀行による積極的な融資
（タイ、フィリピン、エルサルバドル、セネガル、ザンビアなどで実施）
・「水回り（トイレあり、台所なし）と最小限の居室（コア）」を供給

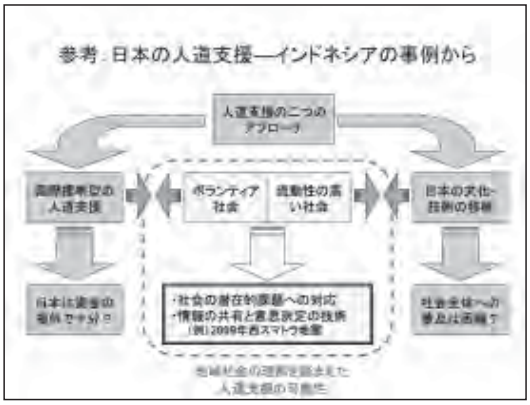
当日配付・投影資料

第二部　流動性の高い社会における知の伝達と定着　趣旨説明

西 芳実　立教大学・AIIC







当日配付・投影資料

支援を見る眼

青山和佳　北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院

支援を見る眼

東南アジア学会2010年度春季大会　2010年6月6日（日）愛知淑徳大学
パネル3　学際研究と人道支援
第2部　流動性の高い社会における知の伝達と定着

北海道大学大学院
メディア・コミュニケーション研究院　青山和佳
waka@imc.hokudai.ac.jp

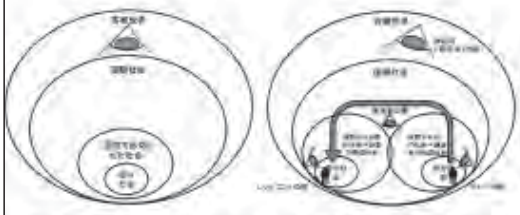
支援の現場で生成する「知」をどう捉えるか

前提：平時から存在する援助（支援）
→「始まりと終わり」は恣意的なもの

視点：援助過程＝複数の社会をまたがるつなひき
→ 知の伝達、知の創造の「場」

論点：援助過程をどのように捉えうるか

図1　重層的社会構造における多様な「現場」を見る「神の眼」と「私たちの眼」



（出所）青山・小林・定田編著(2010)『開発援助がつくる社会生活』大学教育出版、p.7を一部修正

支援過程の可視性

（注）固定的なため、引用不可。
下線は作成者に心理学の「ジョハリの窓」に倣っていると指摘され問題を発見、修正した。
（出所）筆者作成

解釈パラダイム

（出所）ギル・ジョンソン(1997)『質的研究の哲学と実践』
ギル・ジョンソン(1997)『同』
北大図書刊、序章pp.1-10の内容を参考に筆者作成

見えない支援過程の例

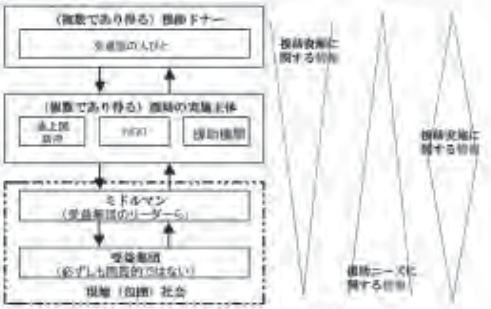
災害脆弱性の克服（地域の安全保障）の観点

・「支援の波」に飲み込まれる自生的組織

・人びとの心理的変化

・取引費用変化と制度創出への影響

図2　援助過程における様々な主体の連鎖と情報のギャップ



（出所）青山・小林・定田編著(2010)『開発援助がつくる社会生活』大学教育出版、p.12

まとめ：支援の現場で生成する「知」をどう捉えるか

結論：「支援を見る眼」はさまざま
→支援過程全てを把握することは困難

含意：「自分の眼」の位置を相対化
→見えてないものへの想像力

提言：他者からの情報発信への関心
→ 受信能力の向上（理解された情報は「知」）

当日配付・投影資料

コメント

服部 美奈 名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授

東南アジア学会 2010 年度春季大会
パネル 3「学術研究と人道支援:2009 年西スマトラ地震で壊れたもの・つくられるもの」
日時:2010 年 6 月 6 日(日)午前 10 時 - 午後 4 時 20 分
会場:愛知大学豊橋校舎 5 号館 522 番教室

■パネル 3「学術研究と人道支援:2009 年西スマトラ地震で壊れたもの・つくられるもの」
■第二部■　流動性の高い社会における知の伝達と定着

コメント　服部美奈(名古屋大学)

■　西スマトラにおける知の伝達・受容・改編の歴史的展開

問い:西スマトラ社会が外部からの知を歴史的にどのように受容し、あるいは改編して、西スマトラ社会にとって「使える」形にしてきたのか。外部から知（制度・秩序・技術・思想）が持ち込まれたときに、どのようなコンフリクトが生じ、どのように解消されたのか。また、これらのプロセスと西スマトラ社会の流動性の高さとの関係はいかなるものか。

【西スマトラ社会の特徴】 ①基本的には新しい知に対して受容度の高い社会、②積極的な意味でコンフリクトが顕在化しやすい社会(力が局所的に偏在しない社会、社会的ヒエラルキーが緩やかな社会)、③男性の流動性が高い社会

一般的な特徴として、①母系制原理を基盤としたアダットとイスラームの共存、②タナ・ダタール、アガム、リマプル・コタという3つの内陸中核地域と、海岸地帯を含めた他のランタウ(周辺地域)という地域のなりたち

【イスラーム】

◆　イスラームとアダットの共存、イスラーム改革思想受容の歴史

18 世紀末から　宗教改革運動としてのパドゥリ運動
1821 年から 1837 年　パドゥリ戦争
20 世紀から　エジプトのムハンマド・アブドゥらの影響を受けたイスラーム改革運動

イスラーム到来以前「アダットは適切さと妥当性に基礎を置く」→イスラーム到来後「アダットはイスラームに基礎を置き、イスラームはアダットに基礎を置く」→パドリ運動後「アダットはイスラームに基礎を置き、イスラームはキタブラ(クルアーン)に基礎を置く」
＊アダットに対するイスラームの優位な関係、同時にアダットは普遍的なイスラームによって完全なものに
＊論争点　財産の所有・使用権の形態、家庭・夫婦の性役割・親子関係をめぐる相違

西スマトラは新しいイスラーム改革思想を蘭領東インドの他の地域に浸透させる上で最も重要な役割を果たした地域の一つ
改革派の優位とタレカット(神秘主義教団)の衰退、独自の自律的な組織による社会活動

今日の日常的な場面でみられる知の受容と改編の例として、通過儀礼(ミナンカバウ的な要素とイスラーム的な要素の混淆)、呪術(病気治癒、悪魔祓いの際の呪文)。

◆　コンフリクトの発生と解消

アダット、イスラームそれぞれの立場からの解釈と論争
男性の場合、ムランタウの慣行を利用することで、過度な衝突を回避(ミナンカバウ社会の外からの発信、折り合いがつかないときにはミナンカバウ社会を出る、もしくは帰らない。ママックとしての役割は残っていても。)　◆　流動性の高さと結びついている

東南アジア学会 2010 年度春季大会
パネル 3「学術研究と人道支援：2009 年西スマトラ地震で壊れたもの・つくられるもの」
日時：2010 年 6 月 6 日（日）午前 10 時－午後 4 時 20 分
会場：愛知大学豊橋校舎 5 号館 522 番教室

【学校教育制度】

◆ 西洋的知識、学校教育制度の受容の歴史

1909 年 パダンにスコラ・アダビアという最初のマドラサが設立
1910 年 フォルト・ファン・デル・キャペレンにマドラス・スクールを設立
1915 年 ディニア・スクール設立

マドラサとよばれる新しい形態のイスラーム教育機関の設立・普及、スラウの変容
当時、最新といわれた知識やシステムを導入。新設科目として、新しいキタープ、地理学、オランダ語、簿記、生物学など。

＊ 西洋的な知識や制度をそのまま受容するのではなく、イスラーム的価値と融合
＊ 社会的上昇・立身出世の一つの手段として、オランダ植民地政府立の学校やマドラサを活用

➜ ◆ コンフリクトの発生と解消 ◆ 流動性の高さとも結びついている

■ 被災と復興の現場で得られた情報から、学術的な研究を発展させる可能性
問い：西スマトラ社会の理解を深める上で、支援の現場の情報を見ることは、どのような意味で役に立つか。支援の現場で生じていることは、平時の西スマトラ社会の様子から想像できる範囲のことか、あるいは、平時の西スマトラ社会について知っていると、支援の現場で生じている謎にどれくらい答えることができるか。

【結論】 ①被災・復興の現場は、研究にとっても豊かな情報を提供しうる場、②平時の西スマトラ社会の縮図が現れると同時に、予想していなかった重要なアクターが出現することで、既存の社会構造・人間関係に変化をもたらす、③ライフラインの構造や村のなりたち、社会構造や社会的人間関係の特徴を、「ある程度」知っておくことは必要である。しかし、固定的な知識を持っていると、逆にそれに縛られてしまう危険性もある。つまり、「動くべきアクター」を最初に想定してしまうことのマイナス面もある。

◆ 研究にとって興味深い点
＊ 支援の現場は生死に結びつくという点で、平時に保たれている「建前」が崩れる（「本音」が出やすい）場であるといえる。緊急の場で動く人（動くことのできる人）は、西スマトラ社会のなかで、平時はどのような立場にいる人々か。氏族で権力をもつとされるダトゥック、女性がどのように動いたのか、そこで発生しているジェンダー関係はいかなるものか。また、西スマトラ社会が流動的に動く人々をどのように捉えているのか。行政・コミュニティ・個人の動き方、連携の仕方をみること。
＊ 支援・復興が、緊急型から長期型に移行する際、どのような人々がキーパーソンになっていくのかを時間的推移でみること。

◆ 知の定着・伝達の困難性
＊ 地理学上のどこかに知を定着させ、伝達、保存するより、移動性に対応するネットワーク型の媒体を使うことの有効性 しかし、一方で個人が常に情報を保持するのではなく、少なくとも電子媒体上で記録・書き残していく作業も重要ではないか

当日配付・投影資料

コメント

山田直子　東北大学

西スマトラ社会における「知」の受容・伝達

- 20世紀初頭外来の「知」が流入する中で、現地社会がどのように議論し、解釈を加え、取り込んだのか？家族や婚姻を中心に
- 2つの事例　＊イスラーム法（婚姻）
　　＊西欧的価値・倫理（家族）

事例1：イスラーム法の受容

- イスラーム法16世紀末から浸透
- 基本的に妻は離婚請求の権利を持たない（例外に対応するための、条件付けは一部の法学派では存在する）
- 妻側から離婚契約の解消ができない＝母系制社会を維持できない
- 1930年代の婚姻証明書

「夫が海路6ヶ月、あるいは陸路3ヶ月以上の旅に出た場合、もしくは3ヶ月に渡って生活費を与えなかった場合は、妻がモスクの役人と面会して1回の離婚が成立したとみなす」

事例1：イスラーム法の受容②

- 当時のセンサス＝西スマトラの離婚率高い
- 結婚と離婚を繰り返す慣習を妨げないかたちでイスラーム法を適用
- アダットと矛盾するイスラーム法を拒絶するのではなく、現地社会の文脈の中で改編し受容
- イスラーム法が解釈の余地を残しているために可能となったとは言え、本来の意図とはことなるかたちでイスラーム法が適用されたことを示している

事例2：西欧的価値観の影響

- 西欧近代の価値観や倫理観の流入
- 進歩とは何か？という議論の中で、夫の妻や子供に対する責任感の欠如が批判の対象となる
- ミナンカバウの母系制社会では、妻と子供に対する扶養の義務は妻の兄弟であり、夫ではない。夫は「牛の尻尾にとまるハエ」
- アダットそのものへの批判ではなく、男性の道徳的義務の強調

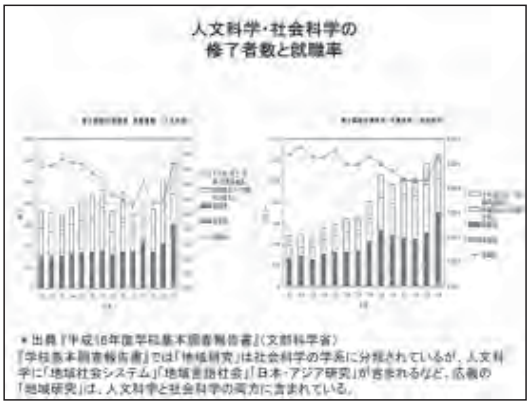
事例2：西欧的価値観の影響②

- 村落社会での核家族化が進み、男性の妻や子供に対する扶養の義務も認識されてきた
- しかし、母系制社会の基本原則は維持
- 外来の規範や価値観を、自らのアダットと矛盾させずに共存させている

まとめ

- 母系制社会の基本原則（世襲財産）は形をとどめ、それ以外については状況に応じて変化
- 村落社会の「柔軟性」と「適応力」
- 経済状況、地勢、変化する価値観や倫理観を現地社会の文脈で解釈、最も望ましい形で導入
- 流動性の高い社会であるが故の特質

当日配付・投影資料

コメント

石井正子　大阪大学